
ネパール夏キャンプ報告書

~ver.2019~



リーダー:橋口愛和 副リーダー:塩塚洋平
会計:中村円香 SP&保険:福田菜々子

目次

1. はじめに	p.3
2. FIWC について	p.4
3. ネパールについて	p.4-6
4. 重要人物&推しメン紹介	p.7-9
5. スケジュール	p.10
6. 事後アセスメント、事後報告	p.11-12
7. 調査	p.13-17
8. イベント	p.18-19
9. ネパールの生活	p.20-21
10. 観光	p.22
11. 各係の反省、報告	p.23-26
12. 他己紹介&感想	p.27-32

1. はじめに

ネパールで 2015 年に地震がおき、復興活動がなされて4年目。

専門知識などを兼ね備えていない私たち学生が、
ネパールのとある山村の、現在の生活を経験し、調査しました。

「ワークキャンプとは何か」

キャンプに行く前に

「村人と一緒に1つのものに取り組み、喜びを分かち合う」
と定義しました。

ネパールで、日本人からは、復興とは言い難い光景もありましたが、
新しく家を建てたり、公共の建物の建設をすすめたりする村もありました。

「私たちはここで何ができるのか」

村人の“これが必要なんだ”“これをしてほしい”ということと、
学生ができることをすり合わせるという試みは難しいものでした。

アジアの極貧国ネパールに二週間滞在し、日本では体感しがたい大自然のなかで、
感じることはキャンパー個人個人で異なっていたと思います。
しかし、渡航前になかったものが、今私たちの中にあり、
今後活かされるのではないかと考えます。

この夏に、ネパールキャンプを終えることができたのは、
温かく迎えてくれたネパール人、アドバイスをくださった先輩、心配してくれたネパールキャンプ経
験者、
キャンプと一緒に来てくれたキャンパーがいてくれたからだと思います。

この場を借りて、お礼をさせていただきます！本当にありがとうございました。

2. FIWC について

FIWC とは、Friends International Work Camp(フレンズ国際ワークキャンプ)の略称である。ワークキャンプ運動が第一次世界大戦後にピエール・セレゾールによって提唱され、第二次世界大戦後にアメリカフレンズ奉仕団(AFSC)によって日本もたらされ、活動してきた。それが、1950年代に日本の組織として FIWC という名で、AFSC から分離・独立した。それ以来、60年以上国内で活動している。現在 FIWC は、関東、東海、関西、九州の4つの委員会があり、それぞれ活動している。

私たち FIWC 九州は主に福岡の大学生が主体となり、運営・活動を行っている。国外では、中国・フィリピン・ネパール・インドネシア(2019年夏)でワークキャンプを行い、国内では、ハンセン病療養所を訪問しこれの啓蒙活動や、大分県中津市の耶馬溪で農業キャンプを行っている。また、福岡県の福智町と関わりを持ち、ワークショップを開催するなどの活動もはじめている。

私たち FIWC 九州は学生による非政府組織(NGO)であり、いかなる宗教・政治団とも一切関係のない学生団体である。



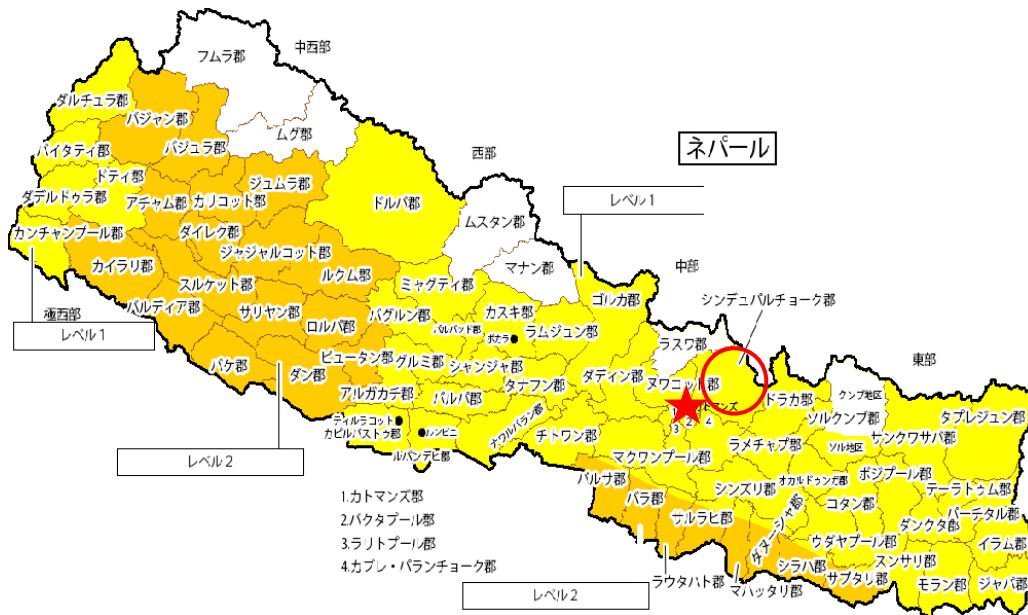
3. ネパールについて

● 基礎データ

首都	カトマンズ
面積	14.7 万平方 km(北海道の 1.8 倍)
人口	2649 万 4504 人
人口密度	180 人/km ²
民族	バフン、チェットリ、タマンなど、60 以上の民族
公用語	ネパール語
宗教	ヒンドゥー教、仏教、イスラム教
開発ランク	145 位
世帯数	542 万 7302 世帯
識字率	65.9%

(ネパール・NGO ハンドブック・2015 年度より)

● 地理

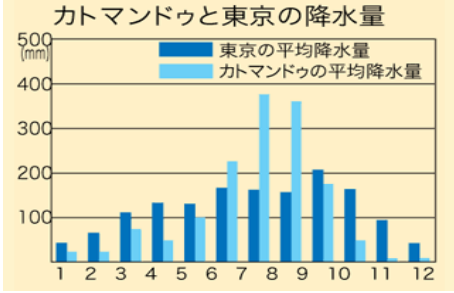
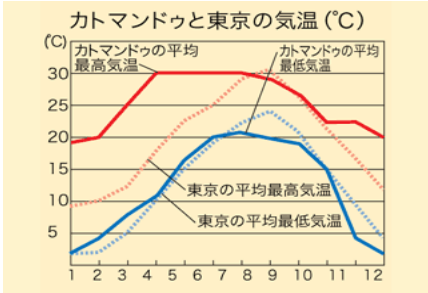


※○部分は、前回に引き続き今回も訪れたキャンプ地の、シンドウパルチョーク郡

※★部分は、首都カトマンズ

(外務省 海外安全ホームページ: https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcinfectionsptothazardinfo_010.html#ad-image-0 より、一部加工

● 気候



(出典:地球の歩き方 ネパールの天気&服装ナビ <http://www.arukikata.co.jp/weather/NP/>

- ・ 一日ごとの気温の寒暖差が激しい気候であるため、早朝と正午過ぎの気温が著しく異なる。
- ・ 年間の降水量の変化が大きく、夏は雨季となり多くの雨が降る一方で、冬から春にかけては乾季となり雨が降ることが少ない。

● **病気～カトマンズ周辺で可能性のある病気～**

- ・ 感染性腸炎(腸チフスを含む、下痢症)・ウイルス性肝炎
- ・ 狂犬病

● **推奨されている予防接種**

- ・ A 型肝炎(キャンパーは必須)
- ・ B 型肝炎
- ・ 腸チフス
- ・ 破傷風(キャンパーは必須)
- ・ 日本脳炎

(予防接種サイト トラベルメディスン

<http://japantravelclinic.com/country/nepal/index.html>)

上記のように多くの感染症の危険性はあるが、予防接種や生ものを摂取しないようにするなどの個人の注意によって回避できるものがほとんどである。

● **2015年4月25日のネパール大地震について**

震源	:カトマンズ北西
地震の規模	:マグニチュード 7.9
被害状況	:負傷者 2 万人、死者約 1 万人、被災者 800 万人(ネパールのみ)
経済損失	:約 6000 億円。

これは当時のネパールの GDP のおよそ 4 分の 1 に値する。

復興状況: 地震発生直後は、多くの国や NGO からの支援が届いた。首都カトマンズでは復興が進んでいるものの、農村部ではトタン屋根の仮設住宅に暮らす人が多くみられる。

4. 重要人物&推しメン紹介

・重要人物

パネちゃん(スンダー・ラマ)

2016年 FIWC 九州がネパールキャンプを始めた当初からこれまでコーディネーター兼通訳者としてネパールキャンプを支えてきた超重要人物。本職はトリッキングガイド。カッコいい、優しい、料理上手、運動神経抜群、筋肉ムキムキ、3か国語(ネパール語・英語・日本語)堪能なハイスペック男子。フレンドリーで初対面のキャンパーとでもすぐに仲良くなれる人たらしの天才だ。そんなパネちゃんの唯一の弱点は、異常なまでにこちょこちょに弱いことだ。いたずら大好きなパネちゃんに何かされたら、こちょこちょが効果バツグンだ。



ママ(コモラ・ラーマン)



寝床やご飯を提供してくれて、とてもお世話になったホームステイ先のママ。ママの作るダルバートタルカリはとても美味しい。いつもいっぱい食べさせようとお飯やおかずをよそってくれるが、そもそも量が多いため、すぐにお腹いっぱいになってしまう。キャンパーが体調不良で食欲がないときも、お白湯を用意してくれたり、少しでも食べたか？と気にかけてくれるし、近所で盛り上がり帰りが遅くなったときも心配して迎えに来てくれたりと本当に優しくしてくれた。ママとの何気ない会話が好きだ。まじり、あざまる、おけまるを使いこなせるネパール人はママくらいだろう(笑)

パパ(ポドム・ラーマン)

寝床やご飯を提供してくれて、とてもお世話になったホームステイ先のパパ。パパは小柄でかわいらしくていつもニコニコしていてなんか、癒されます(笑)キャンパーが立っていたら、「バスヌス！」(ネパール語で座って！という意味)と必ずといっていいほど言ってくれる優しいパパ。ワークの調査で真剣な表情で語る姿をみたとき、村に対する思いとかグンバ(FIWC ネパキャンで建ててきたコミュニティハウス)に対する思いは人一倍強くある方だと思った。



クリシュナー(クリシュナー・ドン)



私たちの活動に大変協力的な村人の一人。本業はアーティスト。クンサンという美人な女の子のパパでもある。とてもフレンドリーで陽気で親しみやすく、話していてとても楽しい。そんな彼だが、聞くところによると相当女好きらしい。今回のキャンプでは、菜々子が標的となって、「カンチマヤル〜！」(ネパール語で愛人〜！という意味)としょっちゅう言われていた(笑)しかし、イベントも一緒になって盛り上げてくれたり、村の自然のプールや滝に連れていってくれたり村を案内してくれて、とても良くしてくれたいい人である。

ミーラン(ミーラン・タマン)

私たちの活動に協力的な村人の一人。バルビシという町で T シャツ店を営んでいるやり手なミーラン。アヤちゃんというかわいい女の子のパパで、よく一緒にいて抱っこしてる姿が印象に残っている。私たちにもすごく優しく接してくれて気さくに話しかけてくれる。そんな彼はとてもおしゃれさんで、髪をセットしたときはくるくるにばっちりきめているし、香水の匂いがいい匂いだったのをおぼえている。



チニマヤ(チニマヤ・タマン)

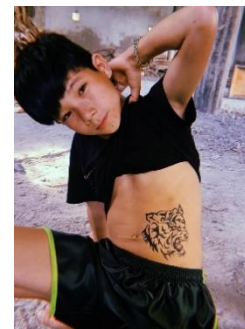


私たちを大歓迎してくれて、FIWC のことが大好きな村人の一人。私たちの寝泊まりしている家のすぐ上に家があって、そこから話しかけてくれたりとかわいらしいチニマヤ。チニマヤという名前はネパール語でチニが砂糖、マヤが愛してる、という意味なので、日本語だと「サトウラブ」だねという話があって以降「サトウラブ」と言い合う謎のノリができた(笑)女子キャンパーにはネパールの女性が腕につけるブレスレットをプレゼントしてくれたり優しくしてくれた。「アリガトウ、トモダチ」と言って別れを惜しんでハグしたりと、日本人の私たちへの愛がすごい。

・推しメン

菜々子→スシル

この子は可愛くてかっこいい！優しくて歌が上手いんです！！スマホの音楽ゲームをずっとしてた笑笑。そしてお母さんとバリ似てる！将来イケメンになること間違いなし！14歳と聞いて自分と4歳しか変わらないと知った時はびっくりぽんやった！成長した君に会いたいぜ☆



円香→イソック



ツンデレで運動神経よいヤンチャな少年。10歳にして4人のガールフレンドをもつ。

キャンディ！とキャンディを要求してくるが、かわいいのであげてしまう。餌付けしたくなるほどとにかくかわいい。

愛和→アヤ

かわいいかわいいアヤ。

まだまだちっちゃいから、いつも気分屋さんだけど、一生懸命「アヤー、アヤー」ってかまってアピールをすると、だっこーって来るところがなんともたまらない♡

前回よりもちょっとお姉さんになったアヤは、髪の毛を結んでブレスレット(ネパールの女性が付ける伝統的アクセサリ)をつけてました。

名前が似てるからか、聞き間違いかもしれないけど、「あいわ！」と言ってくれるのは本当に嬉しかったです。

アヤだけのアルバムが出来ちゃうほど写真を撮りまくりました！

デレイヒツシパレコ(めっちゃかわいい！)



洋平→クリシュナ



クリシュナにはめっちゃお世話になった！色々なことを教えてくれたし、パネちゃんが一旦村を留守にしないとイケない時は面倒も見てくれたりとめっちゃいい人。また一緒にお酒飲みみたいなー。覚えててくれますように！

5. スケジュール

● キャンプ前スケジュール

- 2019.5.13 ネパールキャンプ説明会@西南クロスプラザ
- 2019.5.14 ネパールキャンプ説明会@九大伊都キャンパス
- 2019.5.31 キャンパー締め切り
- 2019.6.5 第1回ミーティング@びおとーぷ
- 2019.6.19 第2回ミーティング@びおとーぷ
- 2019.7.3 第3回ミーティング@びおとーぷ
- 2019.7.10 第4回ミーティング@電話ミーティング
- 2019.7.12 安全セミナー@九大馬出キャンパス
- 2019.7.13 国内合宿@びおとーぷ
- 2019.7.24 第5回ミーティング@びおとーぷ
- 2019.8.14 第6回ミーティング@マック博多バスターミナル店
- 2019.8.19 第7回ミーティング@びおとーぷ
- 2019.8.20 第8回ミーティング@びおとーぷ

● キャンプスケジュール

8/24	福岡空港発(福岡→青島)
8/25	カトマンズ(青島→昆明→カトマンズ)
8/26	グマン村に到着
8/27	事後アセスメント、ニーズ調査
8/28	事後アセスメント、ニーズ調査 バッテ村到着
8/29	ニーズ調査、ラムチェ村訪問。村決定
8/30	ワークが決定した村到着
8/31	イベント
9/1	休養日
9/2	バルビシ訪問
9/3	グマン村でニーズ調査
9/4	ラムチェ村訪問、ニーズ調査
9/5	移動(ラムチェ→カトマンズ)、銀杏旅館訪問
9/6	カトマンズ観光 移動(カトマンズ→昆明)
9/7	移動(昆明→上海)上海観光
9/8	福岡空港着(上海→福岡)

6. 事後アセスメント、事後報告

● 事後アセスメント

前回行ったワークを含めた活動が、前キャンプ地であったグマン村にどのような影響を及ぼしたか調査した。

今回は、コミュニティーハウス周辺の 11 世帯(アセスメントのみ 8 世帯)調査にいき、2019 年度の春キャンプ後のコミュニティーハウスの状態や、使用状況などを口頭質問で調査した。

〈2019 年度 春ワーク概要〉

場所: Maneswara 8 Ghumang Sindupalchok Nepal

内容: コミュニティーハウスの建設(壁、階段、周辺整備)

期間: 2019.2.16~3.24

参加者: コーディネーター(Sundar Lama)、村人(ワーク地在住)、FIWC 九州、棟梁(インド人)

〈アセスメント結果〉

①前回の活動、現状について (回答者:8 人)

1.2019 年の春から 2019.8.26 まででコミュニティーハウスを使用したか?

使用した→4 使用してない→4

(使用理由: 雨宿り、コミュニティーハウスの隣にキッチンとトイレを建設する際に棟梁たちの宿泊)

2.コミュニティーハウスを建設するのは、FIWC とエンジニアどちらの方が良いか?

FIWC→8 エンジニア→0

(最も多かった意見: FIWC により、建設が着実に進んでいると実感しているから。)

3.コミュニティーハウスが完璧に建設されてなくても今後使用するか?

Yes→8 No→0

4.コミュニティーハウスの横にトイレとキッチンができたことを知っているか?

Yes→8 No→0

② FI について (回答者:11 人)

1.FI が来て、良いと思ったか?

Yes→11 No→0

2.FI が行ったイベントは楽しかったか?

Yes→11 No→0

3.また FI が来てもいいか?

Yes→11 No→0

～事後アセスメントの総括～

今回の事後アセスメントにより、現在コミュニティーハウスはミーティングの場としては使われていないものの、ゲストハウスとして、棟梁たちの宿泊場所として使用されており、これから使用方法が広がっていくのではないかと期待できる。また、本来の使用目的である冠婚葬祭や、お参りの場としての使用は見られなかった。理由として、内装の装飾や、建物自体が未完成であることが挙げられる。

今回で 3 回目となる滞在であったが、私たちがこの村で活動することに関しては、良い評価が得られた。

～現在のコミュニティハウスの状況～

- ・春キャンプ終了後、コミュニティハウスの管理者らが政府に請求書を出し、80万円をこの補助金として受け取り、キッチンとトイレの外装工事をした。
- ・今回、これらを建設したことに関しても現在コミュニティハウスを管理している村人に調査した。

※現在、コミュニティハウスの管理者は、この村が地元であるミーラン、チニマヤの息子、家を建設途中のスーレンという3人で成り立っている。

【ミーラン】(3人中1人に話を聞いた)

1. なぜ建設途中の物でなく、新しいものを建設したか？
(理由:今回降りた補助金でのコミュニティハウスの設計が難しかったから)
2. これらを作るときに話し合いはしたか？
(管理者3人のみでオンラインで行い、村人とはしてない。)

【村人】(8世帯に聞いた)

- ・今回キッチンとトイレにお金を使ったことに関して
(まずは、コミュニティハウスを完成させてから次の建物を建設するべきだったという意見が8世帯一致だった。)

現在のコミュニティハウスの外観



80万で作ったキッチン、キッチンの後ろにトイレが建つ。



～事後報告～

- ・コミュニティハウスの建物内や入口にごみが散乱していた。
- ・壁、階段は春キャンプ後と変化なく、修復の必要はないと判断する。

7. 調査

今回は、前回のキャンプ地であったグマン村の他に、2つの村に調査を行った。

1) グマン村

場所: Manesawara 8 Ghumang Sindupalchok Nepal

人口: 300 人

民族: タマン

〈調査〉

・村について: 大きく上下に村を分けることができ、どちらも家、電気の普及がほぼ全家庭にある。水は公共の物が、15 件に 1 つくらいの間隔で設置されている。家庭により差はあるが、個人のシャワールームを持つところもある。

新しい家を建てるなど、地震からの復興は進んでいる。

・調査人数: 11 人

・主な問題点: シャワールーム(公共の水場で体を洗うため個室が必要)、道路

・FIWC の判断: シャワールームを設置することは、女性を中心に需要がかなりあることが分かった。設置できる場所が政府の土地であるため費用面から、学生には厳しいと判断。道路は、学生ができるワークではないと判断。

2) バッテ村

場所: Sindupalchok bahrabise-9 bhatte

人口: 80~100 人(18 軒)

民族: チェットリー

〈調査〉

・村について: 大きな村であったが大半が空家になっていた。これは、震災後に仕事や、被害の復興が早い都心部へ生活の安定を求め移動したためである。復興に関しては、日本人団体がこの村で学校を建設し、学校のほかにミーティング場所としても利用されていた。しかし、公共の水場はなく、乾季に水不足になる。

農作業については、人手不足で使用されていない土地が多く存在する。

・調査人数: 3 人

・主な問題点: 人手不足、水(地震後、大半の村人が村から出ていったから)、道路

・FIWC の判断: 農業を一緒にすることを主にイベントなどを行う案が出たが、次訪れるのは、乾季で農作物は育ちにくいなどの問題からあまり前向きにワークに結び付けられなかった。人公共の水場がなかったが、水源地が村から遠くワーク費用が 200 万を超過するため厳しいと判断。道路は学生団体ではできないと判断。

・バツテでの調査風景

左奥から、ここの村の校長先生・ラズウ(泊めてくれた村人)・テーズバハドルタバ(村の重要人物の1人)



3) ラムチェ村



場所: Sindhupalchok bahrabise ramuche

人口: 150~200 人

民族: タマン

〈調査〉

・村について: 大きな村で、仏教の人がほとんどである。

FIWC 関東がワークキャンプし、コミュニティーハウス(ゲンバ)の建設を行ったり、村の学校に日本からノートなどの支援をしたりと日本人慣れしている村である。復興に関しては、家に水道や電気の供給がなされている家庭が多く、公共の水場もいたるところにあった。仏教徒が多い中

でお祈りの場であるコミュニティーハウスの建設は未だ完成されていない。

・調査人数: 2 人

・主な問題点: コミュニティーハウス(ゲンバ)、道路

・FIWC の判断: コミュニティーハウスが必要だという直接的な声は多く聞くことはできなかった。しかし、この村は、仏教信徒が多いため、ミーティング場所以外にも礼拝する場として、多くの人が利用することが期待できる。道路は、グマン、バツテ同様。

～調査総括～

今回 3 つの村を周り、それぞれの復興の進捗状態の差が分かった。また、地震の影響が残る一方で村人同士の助け合いや、ボランティアや支援に入る団体により、震災前より生活が改善されたという声もあった。

今回の村に共通していることとして、レンガやコンクリートの壁、トタンの屋根でできた家がほとん

どで、雨季の激しい雨から身を守る、住宅に関しては十分であることがあげられる。また、雨季でその村までの道路が舗装されておらず、道が寸断されることがよくあった。

また、コミュニティーハウスについては、どの村も完成、建設されておらず、村人の家や、学校で代用していた。

生活の必要から、質をあげるための声が大きくなってきていると感じた。

※各村の判断の際に 1 つの基準として決めた指標が、生活の必要を満たすか、質を上げるかという観点である。(生活の必要→生活するうえで必要な、家、水、電気、農業、村人が集まって話し合いができるところの充足。生活の質→必要が充足していて、そこにプラスアルファし、より使いやすく生活に反映できるようにすること)

依頼されているワークについて

●人物紹介

名前:ジャナク カンデール

2011年11月、福岡に留学生として来日。1年半間日本語、その後日本経済大学で2年間健康スポーツ経営学科で2年半間学んだ。その後編入試験を受けて西南学院大学で入学して神学部で神学を学び、2018年3月に卒業。卒業後ボランティア宣教師としてインドの西ベンガル市のダージリンでボランティア宣教師として活動中。

●詳細

人口・世帯	300～500人・150世帯		
地震の被害と復興状況	地震のより、建物はほとんど全壊した。 裕福でない人々は、まだ十分な家に住んでいない。		
現時点での状況	・未だに雨季の猛烈な雨から逃れるための家を持ってない人もいる。 ・150世帯で雨季・乾季ともに水が供給できる水源は一つしかない。 ・2017年にこのことについて調査したものの、資金不足で実行できていない状況であった。		
ワーク詳細	2～3週間		
予算	43万～45万		
備考	・土地は、コーディネーターが自分の土地を寄付してくれる。 ・状況に応じて、タンク以外にもシャワールームも設置する。 ・この水場は、季節関係なく湧いている唯一の水源であり、多くの村人が利用してくれる。		

●プロジェクトについて

(直筆であるため、読みにくいところもある)

1、* 水道タンク工場の必要性: (Need of drinking water tank construction)

私を知ってる歴史から言いますと私までは第5世代がこの村ですごし、ずっとこの湧き水を飲んできたことをわかります。私の祖父、叔父さん、私のお父さんそして私達、この湧き水を飲んで日常生活をやってきたのであります。私の家族だけではなく、周りの村人もずっとこの水を飲んできました。飲水としては45家庭で役150人そして洗濯やシャワまたは日常生活には多くの方々がこの湧き水に直接的に生活にかかわっています。

皆様もご存知のように2015年の大地震はネパールという国にとっては BLACKDAY ラックデーでした。多くのネパール人の方々が犠牲になり、まだたくさんの被害者の方々がいます。精神や肉体的に癒しを求めている人々もたくさんいますが、本当に復興して欲し、ちゃんとした家に住み、生活をしたいと求めている方々もいます。これは全て日本であればもうきちんと復興しているはずなんです、ネパールはまだ何もできてない状態であります。これは本当に忍耐していつかきっとネパールの政府の目を覚めて復興活動に進むでしょう来期待して待つしかありません。

しかし政府だけに頼ることも私はいいいとは思いません。できることは我々がすれば村人、その社会に住んでいる人々が少しでも助けていい生活できるのではないだろうかと思えます。

2015年の地震の性で湧き水で日常生活している村人が急に水が出なくなったと聞きました。そのあ後何か月間湧き水で出なくて困ったそうです。その時僕も福岡にいましたので具体的には何ヵ月間湧き水が出なかったのかはわかりません。けれどもしばらくしてからは湧き水が出始めて今もは村人たちがそのお水で日々の生活しています。私もその湧き水を生まれた時から今まで飲んできました。水が美味しいくてミネラルウォーターです。村の住所: マンガルダラ13、アネコト、パンチュカル、カブレ、ネパール(Mangaldhara Anai Kot 13 Panchkhal Kavre Nepal)この村にある。

2、* 水道タンク工場の必要性: (1)

2015年の大地震のせいで以前の飲み水のタンクが壊れてしまいました。その後湧き水もでなくなつてほかの所で水を汲んで飲んだ村人がいろいろな病気にかかってました。しかし今は同じ所で湧き水が出始めたのでその湧き水大切に水タンクを作って保存して村人がいつでも水を飲めるように、そして日常生活に助けてもらいたいためにこの水道タンクが作る必要性がある。

* 水道タンク工場の必要性: (2)

湧き水出ているところが村の中心にあつて村の人々が飲み水汲みに行くのに近くてこの村には一つしかありません。村の人々が選択やシャワするところもここしかありません。そしてこの村人の一日あたりの賃金は300円~500円しかありません。経済的に弱い村人なので自分たちでこのことをする力がないですため私達でこのボランティア活動をする必要がある。

* 水道タンク工場の必要性: (3)

湧き水タンクとして湧き出る水がきれいになり、いつでも村人が飲む水に困らない。そして最。終

的には村人の健康につながる事なのでこの湧き水のタンクを作る必要性がある。

3、飲み水タンクのサイズとキャパシティ容量:

飲み水タンクのサイズは1日は5000lt 二つ目リザーブタンク2000lt。この2タンクがあれば365日間村人が飲み水そして日常生活には困らないと私は信じています。

～今回のワークについて～

ワーク地、ワーク内容を決定できないまま帰国してしまい、十分といえない調査内容でワークを決定することは困難だと考えた。そんな中、日本の西南大学神学部卒業のネパール人の友達から、彼のプロジェクトに是非力を貸してほしいとのお願いを受けた。実際に調査に行ったことのない村にワーク地を決めてしまうのは前代未聞だと確信する。

私たちは、村人からの調査が不十分な村で生活の質を上げるワークと、現地のボランティアをしている人が調査し、署名まで集め、プロジェクト案のある生活の必要を満たすワークをメリット・デメリットを挙げ話し合いを行った。選択するとき、自分たちの目的、目標を明確にすることも重要と考え、村人と同じ目標に向かって活動し、お互いに喜びを共有できるワークキャンプをすることも選択の視野に入れた。

現在、ミーティングの中でプロジェクト立案者と、キャンパー全員で、テレビ電話をして、プロジェクトの内容理解や、話し合いをし、春キャンプの活動決定に向けて村の情報を集めている。

8. イベント

8月30日(土)、グマンマニサワラ村のゲンバ(FIWCが建設に携わった公民館)にて、村人と親交を深めるために、また、日本の文化を知ってもらうことを目的としてイベントを行った。

プログラム

- ① 二人羽織
- ② ライブペイント
- ③ (ボール遊び)



① 二人羽織

二人で行う。後ろに座る人が、前に座っている人の手となり、前の人にカップラーメンを食べさせたり、水を飲ませたりした。見ている人は口に運ばせるように指示したり、わざと口ではなく鼻やあごにラーメンが当たるように指示したりして、子供たちに大ウケだった。

ハリのいい子供たちが積極的に動いてくれたり、クリシュナやばねちゃんなどの顔見知りの大人が率先してやってくれたりして盛り上げてくれた。余ったカップラーメンは子供たちみんなが食べられるように分け与えた。



② ライブペイント

大きな白い布に、絵の具でみんなの手形をつけた。色は最初は緑、赤、青、黄色にする予定であったが、途中からいろんな色を混ぜたのでカラフルになった。



③ ボール遊び

ビニールのビーチボールで水を入れたペットボトルを倒すボウリングのような遊びを行おうと計画を立てていたが、時間がなかったので割愛した。



～反省点～

- ・二人羽織で使ったカップラーメンのごみを持ち帰らずにグンバにおいて来てしまった。
- ・日本人が日本から持ってきたごみなので日本人が処理するべきであった。
- ・日本人は箸を使っていたが、ネパール人は箸を使えないので、フォークなどネパール人でも使えるものを使うべきであった。
- ・ライブペイントでは、手形を布に付けた後、手についた絵の具を顔につけたり腕につけたり、ホーリー状態になってしまった。子供の洋服が絵の具で汚れたり、顔が汚れて泣き出してしまった子供もいた。ライブペイントが終わった後の対処も考えて行うべきだった。
- ・ボール遊びは準備をしていたペットボトルの水を二人羽織に使ったり、絵の具を落とすように使ったりしてしまった。3個あったボールは子供が勝手に持って行ったり、ボール遊びに夢中で二人羽織の時に座ってくれなかったりして落ち着きがなかった。

～総括～

雨季は道が濡れていて滑りやすく、グンバから遠い家の子供もつれてきてしまうと危ないので、近くの家の子供たちだけに絞った。それでもビラを配ったおかげで20人くらいの子供たちが来てくれた。

今回のイベントで二人羽織やカップラーメンなど日本の文化をネパール人に伝えることができた。また、村人と交流し、笑いあうことで、村人との仲が深まった。

9. ネパールの生活について

● 1日の流れ

5:30～6:00	起床
6:00～10:00	Free(だいたい掃除や餌やりなどの家事)
10:00～	朝食(昼食兼用)
ご馳走様～19:00	Free(ワークや子供の相手、洗濯や風呂を済ませる)
19:00～	晩御飯
ご馳走様～21:00	Free(ミーティングなど)
21:00～	就寝

● 食事

食事は朝 10 時頃と夜 7 時頃の 2 回である。ダルバートタルカリをほとんど毎日食べる。まったく同じというわけではなく、使われている具材が少しずつ違うこともありおいしく食べることができた。村の人々はごちそうとしてトウモロコシのペーストを食べるみたいだ。薄い緑色のネバっとしたスープのようなものにディップして食べていた。お酒は、甘酒に似たものと、ロキシーという穀物酒を村人が家ごとに手作りしている。アルコール度数としてはそこまで高くはないのだが、癖が強く日本人には苦手とする人もいると思う。2 回しか食事をとらないから昼頃おながすくので、村の人々は家にあるものを食事と言わない程度に食べるらしい。よく食べたのは、日本では見かけないほど大きいキュウリだ。キュウリと甘酒を一緒に食べることもあるそうで、驚いた。



● 風呂、トイレ

風呂は川の水を引いた共同水場を利用する。日中に入ることができればあまり寒さは感じないが、夜入ると夏でもとても寒い。囲いがないので男性はパンツ 1 枚で入り、女性はペディコートを着たまま入るそうだ。囲いなどを簡易的なものでもいいから作ればいいのではないかと思った。

トイレは和式でイメージとしてはぼっこん便所に近い。用を足した後はバケツなどにためてある水で流す。思ったより匂いはきつくない。



● グマン村

グマン村は正確に把握しきれてはいないが人口は多い。バツテやラムチェに比べたら家のつくりはレンガなど簡単なものが多い。牛やヤギといった家畜も多く、畑もしっかりしており豊かだと思う。学校はいくつかあり実際に行くことはできなかったが生徒数はとても多そうであった。ただ、村の大きさに対して水道が少なく乾季は水に困っている。山の斜面に村があるため、移動は大変であった。調査中にも家畜のえさを入れた大きなかごを背負って、階段を上がる人をよく見かけたが、本当にきつそうであった。村の人々は FIWC が毎年来ている事もあり、自分たちにとってもやさしく接してくれた。調査として家を訪問しているときもお茶を必ず出してくれたり、快く調査に協力してくれた。

● バツテ村



第一印象は、人が少ない事だった。グマン村に比べて村の静けさが際立っていて、村人が地震で村を出ていった人たちを呼び戻したいというのも納得した。建物はしっかりとしたつくりであった。標高約 1600 メートルのところにあるせいか、朝方は霧で回りが全く見えないこともあった。人口も少なく、村の規模もあまり大きくなかったが、売店や学校はしっかりとあった。学校を見学させてもらう機会をいただけたので教室などを見ると、壁にはネパール語と英語で数や物の名前が書かれていた。しかし、15人ほどの子供たちの中で英語を話せるのは1人であった。FIWC が訪れるのは今回が初めてであったが、村の人は温かく受け入れてくれた。

● ラムチェ村

滞在期間が短く村を見て回るということではできなかったが、村の規模はとても大きい。しっかりとしたつくりの家も多かった。トゥモロコシの吊るし方が、グマンやバツテとは違っているなど、村と村での違いを感じる機会も多かった。

10、観光

● 上海

上海観光は行ったことのある菜々子が予定を立ててくれた。最初は空港からタクシーに乗る段階で少し手間取ったがどうにか乗ることができた。外灘という場所で大きなビルやタワーを河川越しに見たりした。そのあとは近くの公園を歩いて、食べ歩きをしたりお店を見て回った。食べ歩きをしたところは、観光客もたくさんいて人気スポットだった。おいしい料理もたくさんあったし、お土産屋さんもたくさんあった。純粋な観光のための時間であったのでいろんなものを見ることができて楽しかった。ボランティアのために行ったけれどせつかくの海外だから少しの息抜きとして観光するのもいいなと思う。



● カトマンズ



ネパールの首都ということもあり建物のも隙間ないほど建っていて、人の数もとてつもなく多かった。ネパールのお店は基本的にはお店の出入り口に見やすく商品を置いてあって、店内は商品が所狭しと置いてあった。物価はやはり日本より低いが、特にお水は安すぎて、本当に安全なのかと思うほどだった。ヒマラヤ山脈があるからだと思うが、アウトドア専門店がたくさんあったし、ほかにも同じような店がいくつもあって、経営は成り立つのかなと疑問に思った。驚いたのは、カトマンズといっても日本と比べたらつたないつくりの店が並ぶ中で、コーデイナーのパネチャンのお姉さんが経営しているお土産屋さんが入っているビルがとてつもなくきれいだっただことだ。失礼かもしれないが、ネパールでエスカレーターを見れる地は思わず驚いた。

11. 各係の反省、報告

会計

● 換金

8/20(火) ¥5,363 → 320 円

8/26(月) ¥155,000 → Rs165,850

※現地通貨はルピー(rupee, Rs)

※換金時のレート: 1Rs=1.17 円

● 支出

	項目	金額(NRs)
宿泊費	カトマンズホテル費	Rs7,820
	村での滞在費	Rs7,500
食費	食費	Rs21,195
	水	
	移動費	Rs58,000
	通信費 ※	Rs1,750
	コーディネーター代	Rs36,000
	ビザ代	Rs12,000
	合計	Rs144,265

※通信費は現地で購入した。SIM カードおよびリチャージカード代である。

また、携帯電話については OB の持っていた SIM フリーのスマートフォンを使用した。

● 収入

繰越金	Rs32,610
生活費	¥143,000(一人当たり¥35,750 徴収)
合計	Rs32,610 + ¥103,000

生活費

→繰越金から 10,000 ルピー使用(コーディネーター費超過分 6,000Rs、感謝日超過分 2,500Rs、ホテルが予約できなくなって、急遽変更したためホテル代超過分 1,500Rs)

● 総括

〈反省点〉

- ・支出があった日の会計 MTG をより丁寧にするべきだった。
- ・記録はもっと丁寧にすべきだった。携帯のメモ機能を使用していたが、簡略化して精算するとき分かりにくかった。

〈改善点〉

- ・会計係だけでなく下見キャンプにおいてはリーダーやメンバーとも情報を共有しておくことがミス防止になる。
- ・丁寧すぎるほど詳細に場면을記録する。

〈良かった点〉

- ・時系列ごとに整理していた。
- ・お店やホテルの領収書はもらった。
- ・ルピーに換金する前に急な出費があっても繰越金から補えた。

〈注意すべき点〉

- ・お店やホテルで領収書をもらうとき、領収書をスムーズにもらうために日本から領収書の紙を用意していったほうがよい。領収書をかくことがあまりないのか手間がかかった場面があった。

● 参加するにあたってかかる費用について

ここでは、キャンプに参加するにあたって、一個人がかかった費用の例を示す。

項目	金額(円)
キャンプ参加費 ※1	2,000 円
航空券代 ※2	41,321 円
生活費	35,750 円
土産代	10,000 円
ワクチン代 ※3	27,540 円
合計	116,611 円

※1: FIWC の規約に則り、キャンプに参加する度に 2,000 円を納める。

※2: 往復分の手段。ルートは行き: 福岡→青島/昆明→トリパン

帰り: トリパン→昆明/上海浦東→福岡

※3: ひのきクリニック 初診料 3,240 円、A 型肝炎 14,040 円、腸チフス 10,260 円、日本脳炎 18 歳以下は無料

保険係

● 仕事内容

～日本にいる間～

- ・保険バックの中身を確認し、足りないものを補充する
- ・海外保険の書類、保険カードの管理を行う※1
- ・ネパールキャンプが推奨している破傷風、A型肝炎、日本脳炎の予防接種の確認※2
- ・アレルギーや持病の確認

※1:海外保険は FIWC 九州の安全対策のルールとして、参加者全員が治療費用 2000 万円以上、救援者費用、その他傷害、過失、疾患等にも保障のある保険に加入すること。

※2:これら 3 つの予防接種は FIWC 九州のルールとして摂取することが特に推奨されている。

～ネパールにいる間～

- ・毎日キャンパーの健康管理を行う。
- ・保険バック、保険カード、海外保険の書類の管理。
- ・けがの手当て、病気の予防。

● 日本から持参したもの

- ・スポーツドリンクの粉 :使用しなかった。
- ・防水フィルム :使用しなかった。
- ・ガーゼ :使用しなかった。
- ・カット綿 :消毒時に使用した。
- ・オロナイン軟膏 :使用しなかった。
- ・手当て用の包帯、テープ:傷などではなく、セロハンテープやガムテープの役目で使用した。
- ・バンドエイド :切り傷、擦り傷等に使用した。
- ・サロンパス :あざができたときに使用した。
- ・サラテクトミストリッチ 30 :デング熱対策でカトマンズにいる間は多く使用した。
- ・ムヒ :虫刺され、ヒルにかまれたところに使用した。
- ・マッキンゼット殺菌消毒液:けがしたときの消毒に使用した。

[薬]

- ・第一三共胃腸薬 :胃もたれ、不快感に。使用しなかった。
- ・バファリン A 解熱鎮痛剤 :発熱時や体の痛み。風邪の症状が出た人が使用した。
- ・正露丸 :下痢、食あたりに。使用した。
- ・総合感冒薬 :のどの痛み、発熱、鼻水などの症状があった際によく使用した。
- ・酔い止め :保険バックではなく個人でもってきていたものを使用した。

- ・便秘薬 : 使用しなかった。
- ・イブクイック A : 生理痛がある人が使用した。
- ・バンテリン筋肉痛滋養強壮剤: 筋肉痛に。使用しなかった。
- ・鉄分、ビタミンのサプリ : 個人でもってきていたため使用しなかった。
- ・虫歯ケア : 歯が痛くなった人が使用した。

〔備品〕

- ・体温計 : 使用した。
- ・ピンセット : 使用しなかった。
- ・爪切り : 使用した。
- ・ハンドジェル : 個人でウェットティッシュを持ってきていたため使用しなかった。
- ・クレベリン : 置き型タイプのみ持参したが使用しなかった。
- ・冷えピタ : 使用した。
- ・キッチンハイター : 嘔吐物処理に。1 度だけ使用した。
- ・ハンドソープ : 手を洗う際に使用した。

〔個人で持参したもの〕

- ・整腸剤
- ・マスク
- ・ウェットティッシュ
- ・黒い袋



● 反省点

- ・今回、人数が 4 人と少なかったため、量も少なくすることができ、荷物がかさばることがなかったため良かった。
- ・毎日 2 回健康チェックを行っていたが、たまに忘れてしまう時もあったので意識をもって仕事をすべきだ。
- ・体調不良者がいた際、周りの人が率先して手当て、看病をしてくれた。
- ・保険バックの中身をもっと理解しておくべきであった。病気になった時の的確な処理をできるようにしておく。
- ・キャンパーが体調が悪くなったら伝えてくれたので、大きな病気につながることはなかった。
- ・キャンパーが大きな病気になった時の対処法を考えていなかった。今回は大きな病気がなかったから良かったが、ネパールやトランジット中の中国で病気になったり、事故が起きたりする可能性もある。もし本当に起こった時のことを考えて、実際の時に慌てずに対処することができるようにしておく。

12. 他己紹介 & 感想

・他己紹介

愛和

ネパールの警察官(なぜか紫の帽子のポリスが気に入り)のことが大好きでかっこいい〜！の連呼！ネパール人 LOVE が半端ない愛和さんは、いつもにこにこしていて元気で感情豊か。見た目と声からふわふわしてると思いきや、実際はサバサバしてるんですっ。切り替え早くて、しっかりしててよく気がつくし、ちゃんと自分の考えもっててすごいです！でも、子どもっぽいところもあって、とっても素直！笑いの沸点が低くてよく笑います！愛和さん、ネパールに連れていってくれてありがとうございました。 by.まどか



洋平



ネパールで髪の毛がわかめになりました、天然パーマの洋平君。なかなか面白い考えを持った人です！仲良くなったら話すのが楽しくなりました(笑)

ようへいからたくさんの影響を受けました！いつも優しく女子を見守ってくれて、いろんなところに気をまわしてくれて、ありがとね！春キャンプでは男子一人じゃないように頑張って新キャンパー探そうね！ by.ななこ

円香

円香はとにかくイソツクのことが大好き(笑)。周りとしては、円香の彼女感がとても面白かった。

絵をかくのがとてもうまく、イソツクやスシルの体にタトゥーに似た絵をかくことで取り合いになってた。そのうえ、自分なりの考えを持ち、ミーティングでの発言もしっかりしていた。春キャンではさらに力を発揮して、お互い頑張りよう！ by.ようへい



菜々子



よく笑う、よく喋る、どこでもなじめるななこ！一緒にネパール行って、
すごく相手のことを気遣う一面も見えたよ！

村人とすぐ仲良くなっちゃうし、なんでも興味持っているななこはキラ
キラして見えました。キャンプ一緒に行けてよかった。

ありがとう！ by.あいわ

・感想

塩塚洋平(九州大学1年)

今回のキャンプは私にとってとても有意義なものであり、自分の中で何かが大きく変わるようなものとなった。私は今回が初の海外渡航ということもあり、驚きの連続でもあった。そんなの海外では当たり前だよ、と思う人もいるかもしれないがだからこそ新しい視点で考えられることのあることだと思う。将来国際ボランティアにかかわりたいと思っており、今の自分にできること、これから何をしたいのか、何を学びたいと思うのかということを考えてながらワークに参加させてもらった。

1番自分の中で考えさせられたなと思うことが、日本は確かにとても恵まれていて住みやすい国であるが、何かもっと大事なものが失われてきているのではないかと思った。それは、人間の温かみであるというか、どこか余裕を感じさせるところというか、言葉にするのは難しいが、ネパールでいいなと思ったことが今の日本には必要なのかなと思えた。ネパールについてすぐ思ったことが、理由は全然わからないがなぜか多くの人が笑顔でいるなという印象がすごい。会話をしてくれた人たちは外国人相手だからと嫌そうな顔をした人はおらず、逆にあちらから話をしてくれた。その際日本語を話してくれる人が多い！英語でもなく、ただの1島国の公用語である言語使ってくれるのがとてもうれしかった。日本人みんなが冷たいというわけではないが、最近はやホンで音楽を聴きながら歩行する人やコンビニで買い物をする人たちもいるなどコミュニケーションを断ち切っている風潮もある。また、1番お世話になったグマン村が豊かだっただけかもしれないが、自分の中で発展途上国、ましてやその村というものはボランティアが必要であるはずだと勝手に決めつけていたが、そういうわけではないと思われもした。自給自足に近い生活をしており、ごみをポイ捨てするといっても生活の中で出るごみの量もともと少ないので思ったほど気にならなかった。逆にもっと日本のごみの排出量などを改善するべきだということに日本にも目を向け始めるいい機会になった。

次は、実際に下見調査をしたことについて話したい。今回の調査は総合的に見て失敗では決し

てないが、成功ともいえない結果になったと思う。1番の原因は、グマン村のグンバ建設にかかわる重要人物であるミーランに話を聞くことが遅すぎたことに尽きると思う。今回に調査でミーランに話を聞いたことで最悪の事態は免れることができたが、早く聞くことができればラムチェ村での調査への切り替えもできたはずだった。今回の調査で重要人物から村人へと聞く順番を決めることが大切だと考えたので今後に生かしたい。また、調査の方法も改めて考えなおすもったいいやり方があったと思う。今回は詳しい話が聞きたいと思い全員に理由を聞くような方法をとったが、時間がかかりすぎた割にあまり有益な意見が少なかったということだ。新しい意見をいくつか聞くことはできたが、全体的に似通ったイメージがあったので、重要人物とほかの村人で詳しく話を聞く方法とyes/no方式の2つの方法を組み合わせても面白いのではないかと思った。あとは、パネチャンがいないと調査できなかつたせいで立ち話が長く無駄な時間が長かつたので、yes/no方式の質問の読み方を聞くことで、読み書きができない人たちにも自分たちで質問できて、数を増やせたのではないかと反省している。

ネパールでの生活は自分にとっての財産になると思う。ネパールについての初日は正直きつかつた。ホテルに泊まれるという安心感のせいか自分の中で心の準備ができていなかったのでホテルの感じについて行けなかつた。少し茶色みがかかつた水、殺風景な1人部屋、共同バス・トイレ、これから村に行くからこれよりもひどい環境なのかと思うとやっつけられるか不安だつたが、村に行った初日にお風呂に行って吹っ切ることができた。ただの水のたれ流しで体を洗うことに最初は抵抗があつたもののやけくそで1度入ると次の日からは何も感じなかつた。行く前から1番の心配事であつた食事は人と変わつていと思うが総合的には何も問題はなかつた。多くの人は始めに物珍しくおいしいと言いつつながら食べるが、同じ料理に飽きていやになつてくると思うが自分は逆だつた。初めの2日はおいしいはずなのになぜか飲み込むことができずに水で流し込んでいたのが本音だ。ただ、回数を重ねるごとに美味しく感じてどんどん食べることができたので良かった。余談になるが食事関係になるので書くが、自分は甘酒とロキシーが苦手みたいだ。何回慣れようと思つてチャレンジするが、どうしても吐き気がしてしまふ。せつかくたくさん飲むことで村人と交流したかつたのに…。総合的に見て、ネパールの生活は自分には合つていたと思う。ネパールにいる間は持つて行つた日本食には手を付けなかつたし、日本食が恋しいと思うこともなかつた。トイレも紙をちゃんと使つたので流せない不便さはあつたが不自由なく、お風呂は解放感もあり気持ちよかつた(夜遅いとさすがに寒かつたが…)

最後に日本に帰つてきて思つたこと、考えたことを書いて終わろうと思う。まず、空気が綺麗！自分は特に中国の空気が合わなかつたのか知らないが空港内でもマスクをしていて、日本は空気綺麗だなと思つたし、海外に行くときはマスク必須だと思つた。あとは、やっぱりあらゆるものが綺麗だと思つた。別にネパールが暮らすのが無理というほど汚いわけではないが、日本が綺麗すぎるなと思つたし日本で少しでも潔癖な人はネパールで生活は無理じゃないかと思つた。と、このあたりで軽い話は以上にして、まじめな内容で締めくくろうと思う。このワークキャンプの自分なりのテーマであつたことで、確信はないが、おそらく自分は海外でも順応に少し時間はかかると思うが生活できると思つた。言葉の壁はあるにしろ、学んでいく姿勢はとれるしもっとネパールについて

知りたいと思ったし、話せるようになりたいと思った。次に、自分がこれから何を学びたいかということだが、これはあまり具体的に決めることはできなかった。挙げるとしたら、ボランティアはすべきなのか？と思ったことと、小規模の団体に活動してもよい結果は得られないのではないかということにはわかった。結局ネパールで春キャンのことは決めることができなくて、日本でもよく考えたが、何が正しいのかが全く分からなくなった。自分の中で自分たちで村人から調査した結果をもとに春キャンで村人の助けになることをしたいと思っていたが、いまのままではそれはかなえられそうにないと思う。妥協だけはしたくない。自分の中ではボランティアに参加するのはネパールに行きたくないとか関係なしに自分の時間を有効活用するというのを考えてラストチャンスだと思うので納得のいく春キャンにするためによく考えて、自分の考えをしっかりと作りたいと思った。

中村円香(西南学院大学1年)

ネパールに着いて最初に感動したことは空港での芳香。どこかで嗅いだことがあるような懐かしさがあった。瞬間的に、ネパールが好きになった。空港を出ると大勢のネパール人が待っていた。視線をすごく感じて日本人だけで異国にいる不安が募った。パネちゃんと合流したときは、物凄い安堵感に包まれた。車からネパールの過ぎ行く街並みを眺めるうちに、「今、本当にネパールにいる！」と感動した。初めてのネパールは何もかもが新鮮で驚きの連続だった。山を登るにつれ道が荒々しくなってきた。岩がごろごろとあり、土は盛り上がり、雨でぬかるんでいて車は何度かスリップした。体験したことのない車の揺れだった。アトラクションのようなドライブも終盤は慣れて、いちいち騒がなくなっていた。村での生活では色々なネパール人と関わることができた。子どもたちは、初めのほうはシャイだが段々と心を開いてくれて嬉しかった。子どもとは戯れて遊ぶことができる。言語の壁をあまり感じなくていい。だが、大人は違う。やはりコミュニケーションを図るには話さなければならない。村人と一対一で話したい。それができたとき、ネパール人としてではなく一人の人間として相手をようやく理解することができるだろう。

ここからは自分はなぜネパールに行こうと思ったのか述べようと思う。自分は発展途上国に興味があった、ボランティアに興味があった。FIWC にネパールがあると知ったとき、胸が高まったのを覚えている。興味本位でネパールという国に強く惹かれた。自分はこれまでの人生において、何もかも中途半端で何かを成しえた経験がない。そんな自分だが、だれかの笑顔のためにするボランティアを経験すれば、見えなかった世界が見えるようになって、人として少しはいい変化ができるのではないかと。ネパールに行って困っている人を笑顔にしたい。またネパールの地で何を思うのか。行ってみてしかわからないことって何だろう。知りたい、感じたい、悟りたい。日本で悠々と生きてきた19年。私がネパールに行って、できることがあるなら行こう。そんな思いを抱いて、このキャンプに参加した。こんな風に考えるのは所詮、先進国の大学生の自己満足に過ぎないのではないかと。そう言われればその通りだと思う。ネパールの活動に何を求めるか。行く前は単純な好奇心が走っていて、ネパール人のためにボランティアする自分自身の成長のパーセンテージが大きかった。だが、行った後思ったのは、純粋にネパール人とまた交流したい。ただ交流するのでは

なく、ネパール人の困っていることを一緒に解決するワークを通して仲を深めたいと思うようになった。

最後に、今回キャンプができたのは滞在させてくれた暖かい村の人々、コーディネーターのパンちゃん、両親、FIWC の先輩方、そして愛和さん、洋平、菜々子のおかげです。ありがとうございました。

橋口愛和(中村学院大学 2 年)

「なんでネパールにまた行くの？」と色んな人に聞かれた。その理由は、私がネパールの虜になってしまったからだ。

ネパールの人柄、街、村の雰囲気、、、

これが本当に好きなのである。

私がこうなったのは、1 年生の春、ネパールキャンプに行ったことがきっかけだ。この頃は、ワークすることや、村人と交流することが楽しくて満足したが、同い年のキャンパーが自分よりも一回り上に見えて、意識の差や、ネパールでの学びの差を感じた。

その時、自分もこんな風にもっとネパールのことを知りたいし、もっと意識高くなりたい！そんなことがきっかけで次のキャンプに行くことに決めた。

ネパールに行行って感じたことがいくつかある。

まずは、ネパールの生活は自然体であることだ。どこを見ても緑でヤギや牛がたくさん。

畑に実ったトウモロコシを家の外に天日干して乾くのを待つ。どこでも大きな声で思いっきり歌っても OK。自然と共生しているなとしみじみ思った。

次に自分たちが生活し、調査して、足りないものって何だろうと疑問に思ったことだ。

日本と比べると不便な点はあるにせよ、それはネパール人の性質を作ってる要因でもあるように思えた。例えば、石でできた階段や、舗装されてない道路、共同の水場だ。滑ったり、雨季には道が通れなくなったり、使いたいときに水が使えないこともある。しかし、これらは、ネパール人の驚異的な体力を生み出すものであったり、身の回りにあるもので代用しようという発想力や、人を大切にするネパール人の温かさの原点なのではないかと思った。

震災から 4 年経ち、自分たちの想像を超えた村人の生活を目の当たりにした。2 回目のネパールなのになんでこんなに予想がつかなかったんだろう、なにもできない自分たちがなぜネパールに行くのだろうと何度も考えた。

この答えは、正解がないと思う。だから、キャンパーと意見を共有し合い、同じ目標で進むべきだと考える。

異文化を経験することは、人生で価値があるものだと思う。

それをどう「価値」とするかもその人の今までの経験や学びで変わってくると思う。

これから、ネパールで何ができるか本当のところまだ明確ではないが、下見で得たことを最大限生かして、次につなげていきたいと考える。

福田菜々子(西南学院大学1年)

今年の夏キャンプにおいて、たくさんの人にお世話になった。キャンプメンバー、国内系のまいさん、ぱねちゃん、現地の方々、両親、FIの先輩方、関わってくれたすべての人に感謝を伝えたい。

ネパールで一番感動したことは、グマン村のビッグツリーで見た朝日だ。ネパールの山々の間から差し込む朝日の光はとてつもなくきれいで、美しいものだった。ネパールの自然は壮大で、自分が小さく感じた。ネパールの山々に囲まれながら、熱唱したのはいい思い出である。村人は大声で日本の曲を歌う日本人をじろじろ見ていたが、そんなことはどうでもよくなる。日本では恥ずかしくてできないことも寛大なネパールではできるのである！

ネパール人はゆっくりのんびり過ごしていて、時間に縛られない生活を送っていた。ネパールで時計を見たのは1日2、3回だ。時間にルーズなネパールでの生活はリラックスできて、ストレスを全く感じない。私は何度日向ぼっこをしたくなったことか。悩んでいる人や忙しい人は、ネパールに行ってぜひ癒されてほしいと思う。心が浄化されること間違いなし！

また、ネパール人は日本人をとて歓迎してくれた。村人の家に行けば必ずチャ(お茶)が出てくるし、ロキシー(ネパールのお酒)を飲ませようとしてくるし、キュウリも出てくる。そして、食べたり飲んだりしながら、長々と話す。私は村人と話す時間がとても好きだった。私たちをこんなにも好きでいてくれる村人に何かしてあげたいという気持ちになった。

ここからは、夏キャンプを終えての反省について話したいと思う。今回、初めてFIのキャンプに参加するにあたって、楽しむことしか考えていなかった。ネパールという国を知って、ネパール人と交流し、友達になることを目標にキャンプに参加した。しかし、キャンプを終えた後、楽しむだけではいけないことに気が付いた。自分はなぜ、何のために、何をしに、ネパールに行ったのかわからなくなってしまった。それは自分が考えずに過ごしていたからだと思う。自分が何のためにネパールに行って、自分に何ができるのか、村人のために何ができるのか、考えることがワークキャンプにおいて一番重要なのだと感じた。

今回の夏キャンプは、キャンプ経験者が1人、新キャンパーが3人という状況で、私たち新キャンパーはキャンプ経験者である愛和さんに任せきりになってしまっていた。ネパールでもぱねちゃんに頼りきりで、自分たちだけで行動することが少なかったように思えた。

キャンプを終えて後悔していることや反省点は多くある。自分が春ネパールに行く目的も、意味も分からなくなった時があった。しかし、夏キャンプで感じたことを春キャンプに生かすために行かなければいけないと思うし、反省点を見つけられたことこそが成長なのだろう。

来年の春キャンプは自分を成長させるために行くのだと思う。今回、夏キャンプで感じたことを忘れずに、反省を生かして行動する。春キャンプに行くのは自分の中で夏キャンプを失敗のまま終わらせたくないから。

NEPAL CAMP

2019 SUMMER

橋口愛和 中村学園大学栄養科学部 2年

塩塚洋平 九州大学共創学部 1年

中村円香 西南学院大学商学部 1年

福田菜々子 西南学院大学国際文化学部 1年

国内係 北川真衣 九州大学経済学部 2年

FIWC 九州（代表：平井ゆうき）

Mail: fiwcg@hotmail.com

Web: <http://fiwckyushu.jimdo.com>

(FIWC 九州公式ホームページ)

Twitter: @fiwckyushu

Instagram: @fiwckyushu

